

あさもよひ紀の川ゆすりゆく水のいづさやむさやいるさやむさや

男

『今昔物語集』卷第三十「人の妻化して弓と成り後鳥と

成りて飛び失する語第十四」より。これは男とその美しい妻の話。ある夜、男は夢を見た。愛する妻が夢に現れて言うことには「遠い場所へ行くことになり、もう会えませんが形見を残していきますから、私だと思つて大切にしてください」。目覚めると妻は忽然と消えていて、枕元に弓が一張立て掛けてあつた。妻は鬼神の化身だったのでと怖れつつ、それでも男は妻を恋しく思うあまり、明け暮れに弓を拭つたりして肌身離さず暮らしていた。

そうして過ごすうち、あるとき弓がにわかにならぬ姿に変わり、はるか南の方角へと飛び去つてしまつたという。雲に紛れながら飛ぶ鳥を追いかけて、男はついに紀伊国にまでやつてくる。するとその鳥が人の姿に戻つた。「やはりあれはただものではなかつた」と思い、来た道を引き返

し男が詠んだのが冒頭の歌。

「あさもよひ」は「麻裳よし」の音便で、「紀の国」の枕詞（「朝催す」で朝食との説も）。上句は「紀の川をどよめかせて流れてゆく水のように」であるが、問題は下句。「いづさやむさや」というのは何か。「狩場」という註もあるが、一体どんなリズムで読むのか。「いづさや／むさや」か、「いづさ／やむさや」か。さらに続く「いるさやむさや」とは何か。『俊頼髓脳』では、結句を「くるさやむさや」と記し、「くるさや」に「この狩場に来たこと、そして紀伊国に追つて来たこと」の「来る」の意味を読み取り、「むさや」は音調を整えるために付けたのではないかと記している。

そうなるなら「いづさやむさや」の「むさや」も意味のない離し言葉のようなものなのか。わかりそうですますますわからなくなる。

あやしい物語満載の『今昔物語集』のなかでもこの話ほどとりわけストーリーも謎めき、歌も呪文のように謎めく。それゆえ妙に心に残る。

（小島なお）

